

| | |
|-------------|----------|
| 群 教 セ | F09 - 01 |
| | 平16.224集 |

互いに認め合い生き生きと 生活する児童の育成

— 理科専科ができる教育相談的なかかわりを通して —

特別研修員 武 佳行 (笠懸町立笠懸小学校)

《研究の概要》

本研究は、互いに認め合い生き生きと生活する児童の育成を目指し、児童が安心して過ごすことができる居場所として理科室を充実させた。また、教育相談的なかかわりを意識した授業展開の研究を通して、児童のコミュニケーション能力を育てることを目指した。

その結果、学校に適應できるようになった児童や、互いに認め合いながら授業に参加できる児童が増えた。

【キーワード：教育相談 授業 コミュニケーション 理科】

主題設定の理由

本校は、児童数が千人を超える大規模校である。保健室登校など不登校傾向にある児童もいる。不登校などの原因は、友人関係、学業不振、家庭環境などによるものが多い。このような問題を解決するためには、治療的な援助だけでなく、児童が「学校が楽しい。」と思えるような開発的な援助をしていくことや、児童の居場所づくりが大切であると考えた。友人関係がうまくいかなかったときなどに、学校の中に気が休まり、安心して過ごすことができる場所や時間(自分の居場所)があると、不登校などの問題に陥らなくてもすむことが多い。理科室や音楽室などの特別教室が児童を受け入れる場として機能すれば、学校が今まで以上に安心して登校できる場所になるはずである。

今年度、初めて担任を外れ理科専科になった。そして、担任とは違った児童とのかかわりが専科にはできることがわかった。新年度が始まってしばらくすると、学級になじめない児童が休み時間や放課後に理科室に遊びに来るようになった。理科室には実験道具などがあり、児童の興味関心を引き出すことができる。また、体験を通して児童同士がかかわりを持つことができることがわかった。

さらに、理科は問題解決学習やグループで協力して行う実験などが多く、授業中における教育相談的なかかわりを取り入れやすい。授業形態や発問などを研究することにより、児童同士が望ましいかかわり合いを持つことができるのではないだろうか。児童同士が適切なかかわり合いを持ち、コミュニケーション能力を向上させることは、一人一人の児童に自信を持たせ、成就感を味わわせることや友達を認める人間関係を築いていくことにつながると考える。

このようなことから、理科専科がかかわり方を工夫して、理科室を充実させ、児童が安心して過ごすことができる居場所づくりをすることが、不登校等の予防につながるのではないかと考える。

研究のねらい

児童が安心して過ごすことができる居場所づくりを目指して理科室を充実させることや、授

業に教育相談的なかわりを取り入れることによって、児童が互いに認め合い生き生きと生活できるようになることを実践を通して明らかにする。

研究の内容

1 特別教室が相談室的な機能を果たすために

(1) 基本的な考え方

- ア 立ち寄りやすい（相談しやすい）雰囲気づくりをする。できるかぎり理科室において受け入れられるようにする。
- イ 積極的な生徒指導を心がける。（心配な児童に対して「休んでいた ちゃんが実験していないので今日の放課後に一緒に付き合ってあげて。」と言って呼び出す。など）

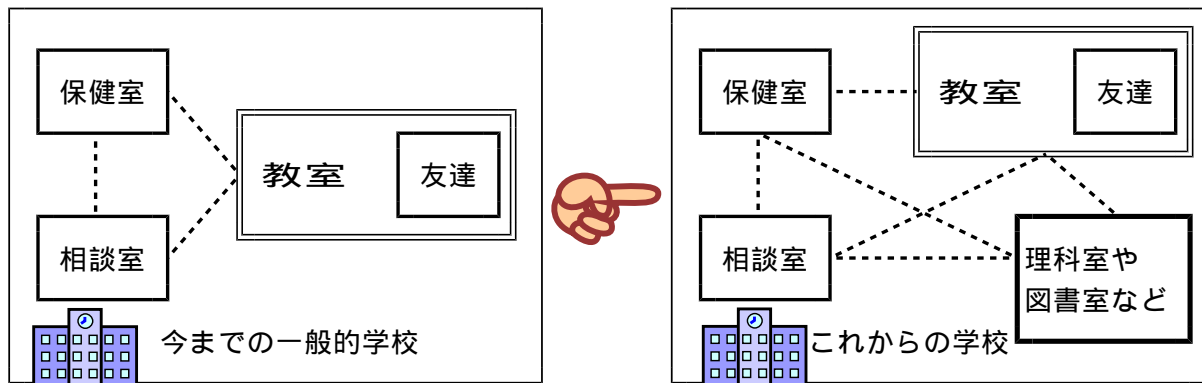


図1 児童の居場所のモデル

今までの小学校は、教室を中心に人間関係がつけられていた。これからは児童が、より安心して過ごすことのできる学校を目指し、特別教室なども児童を受け入れる体制をつくり、児童の居場所づくりやチャンス相談など、きめ細やかな配慮をすることが必要である。



掲示物などの工夫

休み時間等も
楽しく学ぶこと
ができる教材

図2 児童が立ち寄りやすい雰囲気づくり

2 授業における教育相談的なかかわり

(1) 基本的な考え方

授業における教育相談的なかかわりの基本は、一人一人の児童を生かし認めることである。間違った答えを発表した児童に対して、「君が間違えてくれたから、二つの違いがよく分かったよ。君ありがとう。」など、すべての児童が授業をつくってくれる存在になっていることを日常的に伝えることが重要であり、常に授業の中で児童が活躍できる場を考えながら教材研究をする必要がある。

理科は、実験や観察など、グループで協力し合う共同作業が多い。グループ内で役割を決めてから実験や観察を行うことや、結果の考察など全員が理解してから次へ進むことなどの約束を意識させ、かかわりを多く設定する。

(2) 学習の共有化を目指した観察や実験の組み立て(一人一人の児童が生き、集団が育つ授業を目指して)

実験方法について、結果の予想、結果の確認と考察等、目的を持った話し合いは、互いに個を尊重し合い、その違いを認めながら高まっていく場につながる。実験や観察の準備などで一人一人の役割を決め、問題解決の場面でグループ内でしっかりと共有化できるように指導すると個が生き、集団が育つ授業展開となる。

ア 授業のねらいや内容を確認

分かりやすいようにプリントにしたり、黒板に提示したり、クラス全員が確認できるようにする。観察や実験の目的をしっかりと把握することが、児童自身の課題につながり、グループで共有し合うもとなるようにする。

イ 課題や準備、作業の協力・分担

グループごとに観察や実験を行うと、一人で勝手に行ってしまう児童、取り組んでみたいが積極的な児童に先を越され指をくわえて見ている児童、関心が薄く授業に参加しない児童などの問題が起きることが多い。そこで、観察や実験の前にグループで話し合うことを指導して、誰が何をするのか役割を決めたり、課題解決の流れを確認させたりする。これらの取組を通して、児童が互いにコミュニケーションを取り、かかわり合いながら作業できるようにする。

ウ 結果や考察の共有

グループで実験結果などを確認し考察する時間を確保する。個人で考察して終わりにするのではなく、グループ全体で確認し考察することを徹底して指導する。このように指導することによって、学び合い支え合うことの大切さを味わわせ、自分勝手に作業する児童や参加できない児童を少なくする。

(3) コミュニケーション能力の育成を目指した授業の組み立て

ア 意思決定の場を設ける

一人一人の児童が自分なりの答えを持つことが学び合う活動には不可欠である。自分なりの答えを持たなければ、授業傍観者になる可能性が高く、進んで伝え合うことができない。名札を黒板に掲示したり、ノートに書き込ませるなど形に残る意思決定の場を設ける。

イ 観点をしぼった発問

意志決定をするためには「発芽すると思う。発芽しないと思う。」「AかBかCか。」など、児童が自分なりの答えを持ちやすい観点をしぼった発問をする。観点を絞る発問をすることによって、児童は意思決定がしやすくなる。一人一人の児童に自分なりの答えを持たせ、確認させることが、その次の「なぜそうなるか。」「答えはA。理由は。」等のコミュニケーション能力を育てる学び合いの基本となる。

3 実践の概要と結果

(1) 相談室的な機能を果たすための実践

ア なかなか教室へはいることができない児童への実践

(中略、詳細は群馬県総合教育センター図書室研究報告書参照)

イ 孤立しがちな児童への実践

(中略、詳細は群馬県総合教育センター図書室研究報告書参照)

(2) 授業における教育相談的なかかわりの実践

指導記録(5年生 理科)

単元名 花から実へ

目 標 顕微鏡の使い方を確認し、正しい操作でアサガオやヘチマの花粉を観察することができる。

展 開

| 学習活動(教師の働きかけと児童の反応) | ・留意点など 教育相談的配慮 |
|---|---|
| <p>受粉の仕組みを復習し、どんな花を用意すればよいかをグループで考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・つぼみのおしべには、花粉の袋が開いていないので、咲いている花から花粉をとればいいのか。 ・ヘチマは、花粉をつくる雄花をとってくる。(子房がついていない方) ・今朝咲いたアサガオの花とヘチマの雄花を教材園からとってくる。など <p>観察の用意をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・顕微鏡、スライドガラス、観察用のプリント、花を採取してくる等、役割を決めてから用意をはじめ。 <p>顕微鏡の使い方と花粉のプレパラートの作り方の学習する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対物レンズ、接眼レンズ、ステージ(のせ台)、調節ね | <ul style="list-style-type: none"> ・「雄花、雌花どちらに花粉ができる。」など机間指導して、積極的に確認し合えるようにする。グループの全員で確認し合っているか、机間指導する。グループの中に入ることができない児童がいたら、「ちゃんが困っているみたい。教えてあげて。」など、声かけをする。理解できないことをグループ内で質問している児童がいたら、「分からないことをそのままにしない態度はいいね。」など、全体に話をして、上手に教え合っているグループを褒める。グループ内でかかわりを多くするために誰が何をやるかを話し合わせる。全員に役割を持たせ、決まってから行動できるようにする。 ・メダカの卵の観察で使ったときのことを想起させる。 ・低い倍率から観察していくこと |

じなどの用語と使い方を復習する。

- ・花粉のプレパラートの作り方について。

アサガオとヘチマの花粉を観察する。

- ・顕微鏡の操作方法をグループで確認し合いながら観察し、記録する。

アサガオやヘチマの花粉がどんな形であったかグループで話し合い、そのイメージを発表する。

- ・アサガオの花粉は、漫画に出てくるウィルスみたい。
- ・ヘチマの花粉は、ヒマワリの種みたい。
- ・アサガオの花粉は、漫画に出てくるバイ菌みたい。
- ・ヘチマの花粉は、ラグビーボールみたい。など

と、ピントを合わせるときの注意点を確認する。

顕微鏡の操作ができるようにグループで教え合うことを指導し、学び合いながら必ず一人一人に操作をさせる。

勝手に作業する児童がいたら「みんなが分かるように教えてあげて。一緒にできるといいなあ。」など、声かけをする。

安心して意見が発表できるように「～みたいな形。」「～に似ている形。」などイメージを発表させる。また、そのイメージで、観察したことが定着できるようにする。

・考察

観察や実験の前に、グループ内でプリントなどを使って誰が何をするか役割を決めたり、個別に結果予想を立てた後、さらにグループで話し合いをしてから取り組ませることにした。観察や実験が終わった後に、グループの誰に質問してもやり方や結果がしっかり説明できるように教え合うことを徹底して指導した。このような取組を繰り返すことによって、何人かの児童が勝手に実験を進めてしまうのではなく、今まで取り組めない児童に実験をさせたり、教え合い共有し合う姿が見られるようになった。このような取組を繰り返すことにより、コミュニケーション能力も向上し、グループ内で進んで質問したり、教え合ったりすることができるようになった。また、授業傍観者になる児童も少なくなり、学習内容も身につくようになった。



図4 授業の様子

まとめと今後の課題

子どもたちは、自分の居場所(気軽に話せる友達、安心できる空間、信頼できる人など)があると、落ち着いて生活できる。学校という集団の中で生活している児童も、居場所があると生き生きと登校できるようになる。本来、児童にとっての居場所が学級自体であったり、友達であったりすることが望ましい。しかし、自分の居場所を見つけられずにストレスを感じながら生活している児童もいる。児童の居場所を増やし、安心して学校生活を送れるようになること

で不登校の予防や児童同士の間関係づくりができる実感した。

また、学校生活のほとんどは、授業時間である。授業の中で友達と互いに認め合うことが大切である。今までの授業は、教師側からの一方的発信であったり、教師と児童のコミュニケーションであったりすることが多かった。児童同士をかかわらせることにより、友達のことを理解しようとする気持ちが芽生え、互いに認め合いながら学習することができるようになってきた。児童同士の学び合いを深めていく授業が大切である。友達の小さな進歩にも気づき賞賛したり、学習課題を共有したり、認め合ったりすることによって、自信を持つことができ、生き生きと学校生活を送ることができるようになってきた。

これからも、児童相互の望ましい相互コミュニケーションを深め、互いに認め合いかわり合いながら学習が進められるような手だてを工夫しながら授業に生かしていきたい。

参考文献

- ・岡田 篤 著 『ディベートでつくる理科授業入門』 明治図書(1996)
- ・群馬県総合教育センター 『不登校問題 課題解決支援資料』(2004)